お名前	性別	終戦時の年齢	現 住 所
村松 あい	女 性	16歳	設楽町田口

「あこがれの新城高女のはずが……」 会計部給与課職員給与支払班

私たち32回生は昭和16年(1941)4月4日,あこがれの新城高等女学校に入 学しました。第一日曜日には、「桜の会」(同窓会)が盛大に行われました。祖母、 母、娘と三代にわたる同窓生のある方もおられると聞きました。以前には、秋に 「菊の会」もあったようですが、私どもは知りません。一学期は、伝統ある古き 良き時代の充実した学生時代でした。

夏休みを終え、寄宿舎に戻りましてびっくりしました。お米、衣類等すべて配 給制度に変わり、食生活も悪くなりました。12月8日には大東亜戦争が勃発し、 戦時体制に突入しました。

学期末(一学期, 二学期, 三学期)には, 砥鹿神社と本宮山に武運長久の祈願 のため全校生徒で参拝しました。昭和18年4月、3年生になり日に日に出征さ

れる兵士が多くなりました。 私たちは,「春の植え付け, 秋の収穫」の農繁期に勤労 奉仕に出かけました。しか し、初めて使う鍬や備中で す。今考えるとあまり役に 立たなかったと思いますが 気持ちだけは一生 懸命働い たつもりです。

そして4年生の昭和19 年4月、暗雲ただよう中、 豊川海軍工廠へ学徒出陣 しました。私は会計部給与



昭21.4.21の桜の会(同窓会) 写真提供:浅見英紀さん 心字池前で

課職員給与支払班に配属されました。

○ 浅見巌先生の想い出

して私たちを守ってくださいました。新城高女の寮生は、現在の豊川市役所の南 側にあった第一女子学徒寮に宿泊していました。愛知県の女生徒は第一学徒寮 に入ることになっていて、とても大きな寮でした。新城高女だけでも40名ぐらいいたと思います。学校ごとに整列、点呼してそれぞれの配属の職場に向かいますが、新城高女の仕事には夜勤がなかったので、6時半頃の起床で8時頃の出勤だったと思います。正門に向かって、工廠歌を歌いながら行進して行きました。 ちょうしゃ 自動に場で朝礼が行われ、心得として毎朝「忠順誠実、格勤精励、技術報」、規律厳守、質実剛健」と唱えました。そしてラジオ体操をして解散、各職場に就くことになっていました。

浅見先生は、いつも私たちの健康を気遣って優しく声をかけてくださっていました。焼け付くような暑い日も、本宮下ろしが吹きすさぶ寒い日も、昼は総務部、会計部の広い職場を見回り、また学徒寮の私たちの安全のために、昼夜を問わず尽くしてくださいました。時には宿泊されましたが勉強を教えるわけにもいかず、いろいろな話をしていただいたり、般若心経を教えていただいたりしました。今日では想像もつかない日々、「月、月、火、水、木、金、金」と歌われたように、土日のない戦場でした。

職場では、男の人で戦場へと出征する人が多くなり、学徒の仕事も重大な任務となり、残業も余儀なくされるようになっていきました。学徒寮までの薄暗い夜道、浅見先生が心配した。できた変えに来てくださって心強く、またうれしかったとは、生徒にとても慕われていました。夜を先生は、生徒にとても慕われていました。学徒家なしに生徒の安全を考えてくださって、学徒家から帰っても気の休まる時はなかったと思いました。「移りゆく戦場と乙女心」、いろなみがありゆく戦場と乙女心」、いろなみがありゆく戦場と乙女心」、いろなみが導いの女生徒を預かったのですから。毎日「移りゆく戦場と乙女心」、いろなみがありゆく戦場と乙女心で、「御りから」にできたがないた浅見先生に今も感謝しております。



女子寮の食堂 写真:桜ヶ丘ミュージアム

○ 終生忘れることのできない悲しい想い出

8月7日空襲当日は、浅見先生から休暇をいただき、帰省しておりました。 先生から「村松、休みをやるからゆっくり家へ行ってこい。」と言われ、1週間家に帰ったんです。ですから、爆撃の日のことは分かりません。

終戦になり、学校から家で待機するよう連絡をいただき、休んでおりました。 ある日、私宛に白い封筒のお手紙が届きました。胸騒ぐ不安な思いで急いで開封 しました。親友の西塚典子さんのお母様からでした。

「日頃、お親しくしていただきながら御礼のひと言も申し上げもせず、この世を

去りました典子に代わりまして厚く御礼申し上げます。」あまりの突然の悲報に、私は 涙 が止まらずに泣き明かしました。明くる日、典子さんのお家へうかがいましたが、変わり果てたお 姿 を信じることはできませんでした。

毎年8月7日がめぐり来るたびに、お母様と悲しみをかみしめて参りました。 典子さんのお父様がお亡くなりになられた後、お力を落とされたお母様を何とお 慰めしてよろしいやら心が傷みました。その時お母様が、「あいちゃん大丈夫よ。 典子が道を開いて迎えに来てくれ、今典子と一緒に暮らしていると思うから私はなみだしていてね。」と御仏の道を歩まれたお母様のお言葉に、また涙 する私でした。幾たびかお目にかからせていただいたお母様が、102歳の天寿 を全うされるまで私をいろお導きいただきました。今もありがたく感謝いた しております。心からご冥福をお祈り申し上げます。

新城高女の同級生は、一瞬にして22名の尊い命を奪われました。級友一人ひとりの面影は、終生忘れることはできません。これまで生かしていただいたことに深く感謝すると共に、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

